企業社有林を活用した森の子育て広場「森の hahako 園」

森の hahako 園（群馬県）

https://www.facebook.com/morinohahakoen/

取組の目的・背景・沿革等

地域の環境や状況

hahako 園を始めた当時（2012 年）、０歳から３歳頃までの未就園児の子と親が過ごす遊び場は、地域では児童館など室内に限られていた。

取組の経緯・背景・理念等

せっかく自然豊かな土地に暮らしているのだから、子どもたちといっぱい自然の中で遊びたい、そして何より、悩める子育て期をひとりで抱えるのではなく、仲間と一緒に見守りながら“みんなでみんなの子どもを育てる暮らし”を作っていきたい、そんな思いを共有する母親が中心となり、外あそびのサークル活動が始まる。

2013 年暮れ、近所にあったサンデンフォレスト（サンデンホールディングス株式会社の事業所）と知人を通じて知り合った。サンデンフォレストは、環境教育の場として学校含む団体を年間 130 団体程受け入れているほか、環境教育等推進法に基づく「体験の機会の場」(※)の認定を行政から受けており、一般の方に開かれた場所としてのフィールド整備を体系的に行っている組織であった。活動の主旨に賛同し、すぐに「共催」という形で、2014 年の年明けとともにスタートした。

※環境教育等促進法に基づき、土地・建物の所有権等を有する国民や民間団体が、その土地・建物で体験活動を提供する場合に、申請に基づき、都道府県知事等が認定・周知する制度

取組の概要

取組の内容

活動日は月２回。参加は自由で、会員登録や事前申込みは不要。いつ来てもいつ帰ってもいい場所、気軽に寄れる空間を作っている。

施設や場の特徴、プログラムの特徴

お昼ごはんは、おにぎりとお椀１杯分の野菜を持参し、お味噌汁は皆で作る。決まったプログラムはなく、そこに来た人のペースで、お散歩したり、松ぼっくりで遊んだり、絵本の読み聞かせをしたり、ゆったりとした時間を自由に過ごす。自主企画でワークショップを開催することもあり、ものづくり、わらべうた、助産師さんとのお話し会など、内容は多岐にわたる。サンデンフォレストは、自動販売機工場が中央にあり、その周囲を森

が取り囲んでいる。不審者の侵入や子どもが道路に飛び出すといった心配がなく、周囲の目を気にすることなく、思いっきり子どもを解き放つことができる。

実施体制について

自主保育サークルとフィールド所有者（ここでは会社）との役割分担は、プログラム運営＝自主保育サークル、事務局＝フィールド所有者という形である。フィールド所有者が、場所貸しに徹してしまうのではなく、ここでは、hahako 園の運営メンバーとともに企画について話し合い、意図を理解し、書類作成や問合せ対応などを担当している。両者一方が欠けても成立しない、皆が共に作り上げる一員であることが活動を継続していく上で大切なことであった。

安全性への配慮

施設内は、母親目線で危ない箇所を確認し、柵を取り付けたり、高いところに上らないようロープをはったり、通常使用する箇所は定期的にチェックを行っている。自然の中での活動は危険も伴うが、自然の中に身を置いて遊ばせること＝親自身が責任を負う（基本は自己責任）ことを初めて来た人に必ず伝えるようにしている。

地域機関・団体との連携

参加者自身のネットワークによるところが大きく、県内で活動する森のようちえん・自主保育サークルに呼びかけ、「森の hahako フェス」の出展団体として一緒にイベントを実施している。

取組による効果

子供・保護者への影響

取組がスタートした当時参加していた子どもたちは成長し、その弟妹が仲間入りしたりと、子どもの年齢層も幅広くなっている。普段の hahako 園に参加できる方は限られているので、hahako 園を卒業した子どもや hahako 園に共感する地域の方が交流できるイベントも定期的に実施している（森の hahako フェスなど）。来場者が 400 名を越す会もあり、活動はゆるやかではあるが、誰かが無理をするのではない、信頼関係に基づく子育てを越えた仲間づくり・地域づくりに発展していっている。

地域社会への影響

社員の家族も参加するなど、企業内での認知度も高い。テレビや新聞の取材を受けるなど、マスコミに取り上げられることも多くある。

取組を通じて全体的な所感

一番大切にしているのは、自主性。イベントとなると「主催者－参加者」の構図ができてしまい、どうしても参加者が受け身になってしまう。この森の hahako 園は、参加者がその場に積極的に関わり、頼り頼られ、自分の子どもだけでなく、皆で一緒に助け合いながら子育てをしていく場を目指している。